

千年居住圏

東アジアの木の文化 国内外での研究経過

田鶴寿弥子¹、Mechtild Mertz¹、杉山 淳司¹、柳川 綾²、吉村 剛²

京都大学・生存圏研究所

¹ バイオマス形態情報学分野

² 居住圏環境共生分野

1. 研究組織

代表者氏名：杉山 淳司（京都大学・生存圏研究所）

共同研究者：金 南勲（江原大学校・森林環境科学科）

李 元熙（慶北大学・林産工学科）

高妻 洋成（奈良文化財研究所）

田鶴 寿弥子（京都大学・生存圏研究所）

Mechtild Mertz（京都大学・生存圏研究所 客員研究員）

柳川 綾（京都大学・生存圏研究所）

吉村 剛（京都大学・生存圏研究所）

2. 新領域開拓のキーワードと関連ミッション

千年居住圏、樹種識別、新しい分析手法、木材保存

ミッション1：環境計測・地球再生

ミッション4：循環型材料開発、持続的生活圏

3. 研究概要

日本国内での木質文化財調査として、旧園田家住宅（石川県）用材の樹種識別調査、国宝朝光寺本堂（兵庫県）用材の樹種識別調査、総持寺祖院（石川県）用材の樹種識別調査ならびに年代測定、松尾大社（京都府）における神像の樹種識別調査、与謝野町（京都府）一帯における神像・狛犬の樹種識別調査、滋賀県地域における神像・狛犬樹種識別調査を行った。また、指定文化財木彫像の9点の鑑定（美術院国宝修理所、京都国立博物館、奈良国立博物館）を完了した。

8月3日生存圏研究所にて、「東アジアの木の文化」と題する日韓文化財関連国際共同研究ワークショップを開催した(図1)。江原大学教授金教授との共同研究として、韓国産のアカマツの中でも材質にすぐれる黄腸木の解剖学と耐久性に関する研究を開始した。また慶北大学李教授との共同研究として、韓国世界文化遺産海印寺所蔵、八萬大蔵経に使用された木材の材質調査のための非破壊調査法の検討を開始した。X線関連の分析にあたっては九州国立博物館今津氏(文化財用大型CT装置、9月10日に実験開始)とソウル大学李教授(10月29日-11月3日杉山が特別講義ならびに共同研究実施にソウル大訪問)との共同研究を開始した。また8月3日韓国江原大学校山林環境科学大学との間でMOUを締結した。

所内客員研究員 Mechtild Meltz

博士との共同研究でチベットシッキム地域の寺院用材の調査を11月4日より12月2日の予定で実施した。H25年2月、インド林業研究所のサンギッタ博士を招聘し、第12回木の文化「木の文化へのいざない -インド・東ヒマラヤ」を主催すると同時に、インド産木材の樹種識別に関する共同研究を実施した。

最後に、ベトナムハノイ市内の12世紀の遺跡、タンロン遺跡より出土する木材の樹種識別と保存に関する、ベトナム林業大学、奈良文化財研究所、生存圏研究所間の共同研究が開始した、11月にはフン准教授が来室し、1月には高妻、杉山がベトナム林業大学を訪問し、特別講演と学生指導の方針について話会うとともに、タンロン遺跡現地における木材保存状態の調査ならびに指導を行なった。



図1 「東アジアの木の文化」と題する日韓共同研究ワークショップのポスター。